

2025 年度 外部評価委員会 実施報告書

1. 外部評価委員会を終えて

「創価大学自己点検・評価実施規程」第 12 条第 3 項に基づき、本学の自己点検・評価活動の客観性、公平性を担保するため、外部評価を実施しました。

本学は 2020 年度より毎年、全学的な取り組みを対象とした外部評価を実施しており、外部評価委員を 2 年ごとに改選しています。本年度は第 4 期の 1 年目となります。

2026 年度の外部評価は、本学が 2025 年度に取り組んできた内容に関して外部評価委員からの講評を頂く方針としました。具体的には、学長ヴィジョンに掲げている、教育・研究・SDGs・ダイバーシティ・経営基盤の構築、の 5 つの分野で報告内容を構成し、委員会では、鈴木学長から本学の取り組みについて説明したのち、質疑応答を行い、活発な意見交換を行うことができました。後日、外部評価委員から提出された評価報告書では、本学の長所・特色、課題など多くの提言をいただき、改善・向上に向けた重要な視点を多く得ることができました。次頁より外部評価委員からの提言概要を紹介します。

生成 AI の加速度的な進展が大学教育のあり方を根底から問い直す一方で、社会の分断や自国優先主義、力による現状変更といった不透明な情勢が影を落とすなど、世界は激動の渦中にあります。こうした時代にあって、中長期計画「Soka University Grand Design 2021-2030」は、後半 5 年という極めて重要な第 2 のフェーズを迎えました。多様性を尊重し、他者の痛みに寄り添う豊かな人間性を備え、地球的規模の課題解決に挑む。そして、世界平和に実質的に貢献し得る人材の育成にこれからも尽力していく所存です。

最後になりましたが、ご多忙の中、本学の外部評価委員をお務めいただいた委員の皆様に、改めて感謝申し上げ、あいさつとさせていただきます。

2026 年 9 月
創価大学 副学長
全学自己点検・評価委員会 委員長
西浦 昭雄

2. 外部評価委員からの提言概要

(1) 教育

①長所・特色とされた事項

○内部質保証への学生参画

- ・ 学生を含めた内部質保証の取組に着手されている点、その中でも、学生から3つのポリシーの浸透について提案があるということは特筆すべき点である。その認識はまだ低いという認識の通り、全学生がDPを理解して大学生活を送るのが理想であることから、アカデミック・アドバイジングの観点も踏まえつつ、継続した取り組みを期待したい。
- ・ 「学生第一」の学生支援は実現されている。今後も学生参画による内部質保証の推進、やDXを活用した学生支援をお願いしたい。
- ・ 学生中心の大学という理念のもとに、学生参画の内部品質保証や、教員と学生双方のポートフォリオを活用した振り返りの強化を進めており、教育と学びの質の向上が期待できる。
- ・ 学生参画による内部質保証の推進といった点も高く評価できる。

○多彩な教育プログラムと学生支援

- ・ SGUでA評価だったこと、あの難度の高い事業を10年も続けられたことに敬意を表します。THEやQSの結果もその成果とみることができ、この10年で培われてきた体制や教育プログラムを財産として、継続的な取り組みを期待します。
- ・ 授業を含む学生生活全体を通じた「価値創造プログラム」の体系化に着手したことは、学力だけでなく人間力を高める創価教育の訴求につながる可能性もあり今後の展開に注目したい。
- ・ グローバルやデータサイエンス、SDGsなどの取り組みに加え、地域と連携した学びやアントレプレナーシップ教育プログラム、DXを活用した学生支援と、その手厚さは他大学をしのぐものであろう。
- ・ 学生の成長について、学修成果の可視化により実感させるとともに、つまづきの予兆を早期に発見する工夫を行い、生活状況についてもアンケート調査により把握するなど、充実した学生生活となるようきめ細かな目配りをしていることを評価します。また、学生や大学による地域活動は、八王子市の活性化につながっており、深く感謝申し上げます。

②課題とされた事項

○教育成果の可視化と具体化

- ・ 積極的に教育改革に携わり、着実に成果につながっている様子が報告書全体に伺えるが、さらに質の向上を図るためにも、その結果は可視化することが重要である。非常に難しい課題ではあるが、今後は教育学習の成果に関して、エビデンスに基づいたご説明を心掛けていただきたい。特に、グローバル人材育成プログラムは貴学の大きな特徴でもあり、受講した学生がどのように育っているのかなど興味がある。他大学のモデルとなる可能性があるのでぜひお聞きしたい。

- ・ 各種ランキングにおいて上位項目があるが、この内容・中身が周知されていない。創価大学なら、〇〇の項目で上位にランクすることは当然・納得、させるような取り組みも必要。グローバル教育(SGU)も十分な取り組み、成果は出しているが、対外的にもうひとつ殻を破れていない気がしており、創価ならではの尖ったもので、創価大学＝国際、グローバルな大学、を浸透させていく。
- ・ 学生自治会など学生団体も巻き込み、大学と学生が一体となった情報発信というような、さらに踏み込んだ施策を検討してほしい。少子化が進む中で、創価ブランドを熟知した層以外への高い教育力に関する認知度をどう高めていくのか。この点について早急に取り組まないと、縮小再生産のスパイラルに陥ってしまうのではないかと。非常に難しいことではあるが、もはや避けては通れない課題である。

教育の中身、それによって培われる就職力などをどうアピールしていけばいいのか。戦略的な取り組みが求められる。中でも、有名企業400社への就職率などは、就職氷河期世代の保護者には大いにアピールできる指標である。キャリア支援の一環として、そうした指標を意識することは、競合する大学との差別化につながり、ブランディングにも寄与するはずだ。戦略的なキャリア支援のあり方を考える上でも検討すべきものとする。

○地域・社会や高校と連携した開かれた大学づくり

- ・ 大学として「開かれる」ことが重要であるとする。国際化を重視していることはよく理解するところではあるが、八王子に立地する大学として、地域で学び、地域から学ぶことが重要である。その中で、大学が地域に貢献できるコンテンツとしてAI利用がある。AIをどう活用していくのか。八王子のAI人材育成に貴学が関わることで、WinWinの関係を築くことも可能である。学生がもっと地域に出ていくために、コーディネーターのような第3の職種の活用も検討されたい。
- ・ 地域連携についてだが、地元八王子市とは深く連携しているが、幅(エリア)を拡げることも必要ではないか。地域連携とは言い難いかもしれないが、〇〇県、〇〇市でしか出来ないこともあるので、新たな拡がり、一面を見出せる可能性がある。
- ・ 高大接続について、18歳人口が減少する中、「選抜」から「接続」へと概念が転換している。附属校だけでなく、全国の高校の探究活動と総合型選抜をどう繋いでいくか、ぜひ検討いただきたい。

○AI時代の新たな大学教育の構築

- ・ AIは実体験ができないというデメリットがある。さまざまな国際ランキングの評価にも表れているように、だからこそ、グローバル、地域、高校と、様々な場所で越境するようなプログラムを展開する素養が貴学にはある。新しいAIの時代に、貴学が今後もさらに大きく羽ばたくような教育のあり方を期待する。
- ・ 生成AIやエージェンティックAIが急速に進展してくる中で、大学教育においてAIとどう向き合っていくかは今後の新たな課題になると考える。また、データサイエンス教育の拡充やDX活用による学生支援の強化等にもしっかりと成果を出されているが、テクノロジーの進展が非常に速いため今後はより一層の拡充が望まれる。

(2) 研究

①長所・特色とされた事項

○重点研究の推進

- ・ 重点研究の中でも特に糖鎖生命システム融合研究所が行っているグローバルに展開する研究を高く評価する。その成果を積極的に可視化する中で、特に一般人にもわかりやすい形での情報発信を望む。
- ・ 重点となる研究を定め力強く推進していることは、大学のガバナンスや組織力の表れでもあり、他大学の参考にもなる取り組みと思われる。また、海外にも拠点を開設されていることも注目に値する。今後も継続するとともに、重点分野以外の研究についても、おそらく多くの優良な研究があると思われるので、それらの発掘、発信にも意識を向けられるとよいだろう。
- ・ 世界が注目する、評価されている研究を創出、推進していることは大いに評価できる。
- ・ 「糖鎖生命システム融合研究所」「プランクトン研究所」「マレーシア研究拠点」などの取り組みは、社会課題の解決に資する研究であるだけに評価できよう。また、「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」を建学の精神に掲げる創価大学にとって、国際平和学研究科は、特筆すべき研究の拠点であろう。昨年も指摘をしたが、国際情勢がますます不安定さを増す時代にあって、国際色豊かな研究者がそろう研究科だけに、その存在を社会に知らしめるような研究や取り組みを期待したい。
- ・ 優れた研究成果は高度な教育につながるものであり高く評価すべきものと考えます。

②課題とされた事項

○研究内容の更なる発信

- ・ 世界が注目する、評価されている研究が周知、認知されていない。研究者・教員の外部への発信、他大学との交流、共同開発等の積極的な言動が必要では。
- ・ 重点研究分野での成果が国際的にも認められていることに関して、国内の関連機関や民間企業に対しても積極的なアピールと連携があれば、もっと知名度があがるのではないかと。海外大学との交流において、今後の関係性をより発展させていくためには、学生同士の交流だけでなく教員を含む研究分野での交流がより一層重要になると考える。
- ・ 改めてウェブサイトを確認してみたが、ニュースの更新はされているものの、活動などの項目の更新が後手に回っている印象を受けた。サイトの見やすさも含め、改善の余地はあるように感じる。
- ・ 研究に集中できるよう、産学連携等の事務負担から研究者を開放できる工夫も必要という考えには共感する一方で、人件費の問題が伴うものであり、一朝一夕には解決しない難しい課題であると感じました。

(3) SDGs

①長所・特色とされた事項

○ポスト SDGs を見据えた取り組みの着手

- ・ ポスト SDGs の取り組みを始められていることは特筆すべきことである。
- ・ 地域との連携も含め、さまざまな取り組みは高く評価できる。また、アフターSDGs を見据え、野心的で独自の取り組みを進めることができれば、大学のブランディングにも大きく寄与すると考える。学内では教職員と学生が一体となって取り組みつつ、その運動について、これまで以上に地域を巻き込んだ活動に広げることで、地域の中核大学としての存在意義を高めてほしい。
- ・ 2030 年以降のアフターSDGs も見据えた動きが始まっているなど、着実に取り組んでいると感じます。

○全学的な SDGs 施策の着実な推進

- ・ 全学 SDGs プロジェクトを、学生を巻き込みながら推進している。教育においても、地域におけるサービスマーケティングが定着して生きているほか、SDGs 副専攻の本格化することになるので、今後に期待したい。
- ・ 毎年、学内のカーボンニュートラルや地域および産学連携での社会実装等に取り組まれ、その積み重ねが文科省の支援事業に採択という形で評価されたことは非常に大きな成果と考える。社会課題解決起点での研究や取り組みは、創造的思考力を鍛えることにも繋がるため、まさにこれからの AI 時代に求められる力であり、本学のブランディング強化のためにも毎年のレベルアップと社会実装化に向けた案件創出に期待したい。
- ・ いち早く、積極的に、取り組んでおり評価出来る。カーボンニュートラル達成に向けた取り組みも推進し、継続して、各所と連携し、地球をより良い方向に導いて欲しい。新設される「グリーンテクノロジー学科」においても、地球規模の課題を解決する一助となる研究、学びを期待する。

(4) ダイバーシティ

①長所・特色とされた事項

○国際化推進への高い評価

- ・ 前述した通り、SGU で A 評価だったことは本当に素晴らしく、THE や QS の世界ランキングの結果もその成果だと思われる。
- ・ グローバル化を牽引し、キャンパス内も多種多様な人種・国々の学生が多く、グローバルキャンパスであることが実感できる。SGU 終了後も継続し、国際色豊かな大学であってほしい。
- ・ 外部の大学ランキングで本学が国際性分野で全国 8 位となったことは、これまでの SGU の取り組みが評価されたものとして非常に高く評価できる。報告書に記載のあった「学生の主体的な国際活動参加を促す取り組み」については、他大学が JICA との連携協定による学生派遣や研究協力を実施するなどの事例があり、本学の国際的なネットワークを活かした制度設計や仕組み化に期待したい。

○ダイバーシティ&インクルージョンの着実な進展

- ・ 今年度、鈴木美華教授が学長に就任し、事務職員の部長に女性が就任するなど男女共同参画の上からも高く評価できる。執行部への女性の大胆な登用は組織風土の改革にもつながるだけに今後も継続的に進めてほしい。
- ・ DEI の観点の中でも、特に留学生という多様性を大事にする貴学においては、その特徴をもっと前面に押し出して多様性ある教育研究を押し出すべきであると考えます。COIL などの先進的な教育方法も取り入れているということであり、わかりやすく高校生に発信する必要がある。
- ・ 女性職員の比率は目標に達していないものの、30 代以下の職員においては 50% 近くに及んでいるとともに、男性の長期の育休取得者が増加するなど、着実に取り組みが推進されています。

②課題とされた事項

○働き方の多様化を支える環境整備

- ・ 女性教員比率の目標値達成は大いに評価でき、今後も継続しながら、改善を図ってもらいたい。一方女性職員比率、若年層は高いので、どの世代でも男女半々になるよう、ワークライフに合わせた施策や環境の整備が必要(男性職員の環境にも配慮を)。
- ・ 女性教員比率の目標値を達成され、今年度から学長をはじめ要職に女性教員が登用されたことは、学内外に向けて大学が変わろうとしている意思表示として非常にポジティブに捉えている。女性職員の比率に関しては目標値に至らなかったものの、教員の比率を上回る 33.2%と年々改善されており高く評価できる。男性育児休暇の取得者も増えている状況を委員会で確認できたが、今後も引き続き制度面を含めた働き方の多様化に期待したい。
また、性別、国籍だけでなく、世代間格差も多様性の重要な視点と考えており、DXやAI社会の進展によって益々複雑化することが予想される。それらの観点も踏まえて、2030 年または次期計画のダイバーシティ指標の見直しをされてもいい時期ではないかと考える。
- ・ 目標を定めて取り組みをされている点は評価できる。一方、その目標にまだ到達できていないので今後に期待したい。

(5) 経営基盤の構築

①長所・特色とされた事項

○教育の質向上を目指した改革

- ・ 規模の縮小は質の低下に繋がるのではなく、むしろ質の向上に繋がるはずだし、繋げなければならない。2026 年度以降の取り組みに期待する。
- ・ 人口減少を背景に厳しい経営環境の中、2026 年度の学部学科改組および定員数の 2 割削減は、質の高い教育が提供されるという意味で今後に期待したい。
- ・ 通信教育課程でのオープンバッジ付与などの社会人の学び直しを促進する工夫が行われてお

り、社会人の学びのモチベーションを高めるきっかけにつながるものと評価します。

- ・ 「価値創造を实践する『世界市民』を育む大学」というスローガンのもと、上述の教育、研究、SDGs、ダイバーシティという4つの戦略分野を掲げ、それを推進していく経営基盤強化策として「中長期財政計画」「キャンパス整備」などのプロジェクトに取り組んでいる。

②課題とされた事項

○これまでの取り組みを発展させた募集戦略

- ・ 2026年度から定員削減もあり、学費納入金の減少は避けられない。経営基盤の安定化＝志願者数・入学者数の安定的な確保が必須。ここ3年の入学者数レベルで、と想定してはいけない。受験生動向の毎年変わるのが現状で何が起きるか分からない。

通信教育課程(リカレント教育)の充実、促進を図るなど、学費、寄附金等の減少が避けられない状況下では、増収経営基盤の安定化という点では重要度は高い。

- ・ 今後のリカレント教育について、タスクフォースを立ち上げて調査を開始されたとのことで今後注目したい。また、SGUを掲げる大学のブランディングに向けて、留学生を含むグローバル人材がどこでどのように活躍しているかを可視化することや、海外からの留学生のネットワークづくりの取り組みにも期待したい。学部・通学課程だけでなく通信教育学部の定員充足率が年々減少という状況に関しては、18歳未満の人口減少だけでなく、激化する競争環境や加速度的な時代の変化に対して、より一層スピード感のある対策と中長期の戦略的な改革が必要ではないかと考える。

○新たな収入源の具体的検討

- ・ 入学定員の見直しによるダウンサイジングを進めていくことは、少子が進む中では致し方ないことだが、学費収入の減少をどう補っていくかについては、今後の柱となる取り組みが見えていたとは言いがたく、少々厳しい評価としたい。また、寄付制度において「大学版ふるさと納税」ともいえる返礼品付きの寄付制度がある。大学のオリジナルグッズや大学が立地する八王子市とコラボした名産品を返礼品にすることなどを検討したい。すでに東北大や芝浦工大などが取り組んでおり参考にしてほしい。この取り組みは手間がかかるのは事実だが、寄付を身近なものにするものであることを付け加えておく。
- ・ 産官学連携を進めることで、収入を増やすことも重点項目として取り組むべき課題である。信州大学繊維学部が地元の上田市と2005年から取り組んでいる一般財団法人「浅間リサーチエクステンションセンター」の事例などは参考になろう。大学と企業、自治体をつなぐコーディネーターの役割が重要になってくるが、それぞれが持つシーズを活用できれば、3者がウインウインの関係になることで、新たなイノベーション、産業の創出が生まれるだけでなく、地域の魅力アップにもつながる。多様な学生の確保をするための入試制度にせよ、奨学金の充実を図るにせよ、そのための収入をどう増やすのか。余剰資金の運用をどう進めるのかも含め、早期の戦略構築が求められているのではないかと考える。

3. 外部評価委員からの講評

- 大きな輝くすばらしい取り組みがいくつもある中で、それらが学部のカリキュラムにどのように関係し、連携していくのかが見えにくくなっていますので、それらも含めて今後に期待します。
また貴学が AP 事業で開発されたアセスメント科目は多くの学生に影響を及ぼす良い取り組みです。ぜひ次回は報告書にも記載ください。
今後、学修成果の可視化がますます重要になります。IR の結果がどのように構成員に共有され、そして改善提案につながっているかが内部質保証として重要です。その観点を中心にぜひお知らせいただきたく思います。
- 昨年度の評価委員会の結果を踏まえた取り組みをされているところに、改善に向かう強い意思を感じることができ、素晴らしい。
どの分野においても、しっかりと取り組まれていることがわかり、S なのか A なのかを迷ったが、真摯になされている自己点検の結果を尊重し、期待を込めて A とした箇所が多い。
また、地域連携についても、情報を集約され示されたことにも注目したい。多くの地域連携事業がなされているところではあるが、それがカリキュラムの中に取り込まれていき、地域と大学の真ん中に学生が存在するような地域との関係構築に期待したい。
- 平和や人権、気候変動、環境問題、SDGs、国際化、これからの地球や世界では、さらに大事に、深く考えていかねばなりません。これらのテーマは貴学がいち早く取り組んできたパイオニア大学です。どの世代においても、自ら課題を見つけ、自ら解決することが重要視されています。
貴学において、いま何が出来るのか、それに向けて大学全体がどう取り組むのか、社会・地域貢献は出来ているのか。この大学なら、どのような学び、研究、教育、進路が得られるのか、といった点を高校生・保護者・高校教諭・地域社会は知りたがっていますし、大学から発信しなければなりません。積み上げてきた実績と信頼が周知されることで、「選ばれる大学」「開かれた大学」に繋がり、大学全体がより良い方向になると思います。
学生×教員×職員が危機感を持ち、垣根を取り払い、一丸となって同じ景色を見ているか、今後も大いに期待しています。
- 来年度からの学部学科改組、定員数の見直しを控えており創価大学として大きな転換点にありますが、縮小均衡ではなく 2030 年度に向けた新しい出発というポジティブなメッセージを学内外に積極的に発信していただきたいと思います。上記の通りこれまでも質の高い教育と数多くの成果があり、社会に、世界に開かれた大学として特色を訴求し続けていくことが必要だと思います。
また、2030 年のグランドデザインの折り返し地点となり、大きな柱はそのままでも各々の戦略の中身や K P I については必要に応じて見直しをお願いできればと思います。特にこれからは A I による破壊的イノベーションが起これと言われているため、A I とどう向き合っていくかは避けられないテーマになると思います。様々な外部連携を通じた情報収集やコラボレーションから、A I 時代の教育や学びの在り方、求められる人材像などを多角的に議論し、次期計画検討に反映していただきたいと思います。
不透明かつ不連続な変化の時代だからこそ、建学の精神を核に、人間性を発揮しながら社会をリードする人材を排出する大学として、益々の発展を期待しております。

- ・ 現在、高等教育関係者の間で「2035 年の崖」ということが言われるようになってきた。10 年後の 2035 年以降は急激に 18 歳人口が減る。「まだ 10 年ある」なのか、「あと 10 年しかない」のか。いうまでもなく後者である。創価大学は現在、財務基盤もしっかりしており、素晴らしい教育環境が整い、学生の満足度も高い。だが、その魅力の多くは、創立者の魅力や信念、行動力に支えられてきた面があることは否めない。創立者亡き後、高等教育機関としての魅力をどう伝えていくのか。やるべきことは、その一点にかかっているのではないか。

評価委員会で、私はキーワードとして「連携」ということを提示させていただいた。大学間連携、地域連携、高大連携、医工連携、産官学連携…。これからの 10 年を見通した戦略的な連携を進めることが、創立 100 年に向けた大きな鍵になるはずだ。

- ・ 18 歳人口が減少する中で様々な工夫を行い、優れた学生を育成するための細やかな配慮に満ちた教育を行う大学であることを改めて確認できました。

2. 外部評価委員からの提言概要

(1) 教育

①長所・特色とされた事項

○「学生第一」を具現化した学習ポートフォリオ

- ・ 2026 年度からリニューアルした学習ポートフォリオについて、「学生第一」の理念と「学生を信じる」設計思想を高く評価します。「未来スケッチ（チャレンジ目標の設定）」と「キャンパス・ロードマップ（4 年間の計画）」やデジタルバッジの取り組みは、学生にポジティブなインセンティブを与える画期的な取り組みですので、学生が設定する目標と、大学が 4 年間の学びの成果として保証する「ディプロマ・ポリシー（DP）」との関係が今後有機的に繋がっていくことを期待します。
- ・ 全般的に、教育プログラムを DP に基づき真摯に構築し、成果等も示している。今年度からの新しい形としてのポートフォリオ「未来スケッチ」の像がまだ見えていないが、期待を込めて評価したい。
- ・ DX を活用した学生支援で、学びのつまづきを予知できるシステム構築に取り組んでいること自体が素晴らしい。（出席状況のヒートマップ化、提出物の状況から感知できるよう、何とか学生のためにできないかと取り組んでいることに感動しました。）
未来スケッチ、キャンパス・ロードマップの取り組みも先進的で、自分の思い描いたもの、目標に向かうプロセス、感情の記録などできて興味深いです。
- ・ DX による個別支援も進んでおり、全国学生調査の結果にも、その成果が表れています。今後は生成 AI 時代を見据え、学生が自ら問いを立て、考え、学びを共創する力をどう育てるかという次の教育モデルにも期待しています。

○内部質保証への学生参画

- ・ 内部質保証の重要性がうたわれて久しいですが、なかなかそのプロセスに学生が参画する仕組み作りは進んでいないのが日本の大学界の現状であるなか、早い段階でそれを意識し、取り組みを進めてこられたことも、学生第一の創価大学ならではのことで高く評価します。
- ・ 学生第一という理念が、学修支援から大学運営への学生参画まで、具体的な仕組みとして根付いている点を高く評価しました。特に、学生を教育の受け手ではなく、大学を共に創る主体として捉えている点は、創価大学ならではの強みだと感じます。
- ・ 学生参画の運営、そして学生の実際の参加と継承は意義があり、今後の更なる成果を期待したい。
- ・ 内部質保証への学生の参画ももっと、先進的に取り組んで欲しいです。欲を言えば、社会人、地域住民向けの公開講座やリスキリングへの取組みが増えるとよいかと感じました。大学駅伝なども力を入れておられると思いますが、スポーツ面での支援はどのように行っているか是非、伺ってみたいと思いました。副専攻の修了割合（3 割程度）は、是非とも向上できるよう、ご検討いただきたいと感じました。
- ・ 内部質保証の推進や DX 活用は年々ブラッシュアップして、より良い仕組みとなっているが、「学生第一」「学生のための」というフレーズに対し、近年見劣りしている部分はないか。学生が主体的、意欲的に、楽しみながら学生生活を送れるよう尽力してもらいたい。

②課題とされた事項

○AI 時代における人間力を育む教育

- ・ 今後避けて通れない「AI」に関して、2025 年 4 月に方針を出しているが、もう一歩二歩踏み込んだ施策、方針を大学として確立すべきと考える。グローバル教育(SGU)も十分な取り組み、成果は出しており評価は出来る。今後、大学として、英語プログラム、英語トラックの充実、東南アジアの優秀層の囲い込み等、創価大学＝国際、グローバルな大学、をさらに浸透させていく必要がある。
- ・ 学習ポートフォリオをはじめとする取り組みについて、「DX」を前面に出すよりも、「学生が自分の未来を描き、ロードマップを作り、学びを可視化するプロセス」が本質であるかと思います。「DX」はあくまでそれを支える手段であり、「DX」を前面に出しすぎるとその本質が伝わりにくく、価値が単純化されてしまうことを懸念します。
- ・ AI を活用した新たな教員・学生向けインフラの導入とその利活用については、今後も引き続き改善を続け、さらに良いスキームへと育てていただけたらと思います。委員からのコメントにもありましたが、DX や AX を前面に出さず、あくまで DX/AX を活用して学生第一の取り組みを向上させていく、という視点に変えていかれると、学生への浸透度や学外へのメッセージの出し方も変わっていくと思います。

また、現場で質問もさせて頂きましたが、就職活動支援×AI について、更に学内で議論を重ねて頂くのも一案と思います。AI による支援だけではなく、変化の速い AI 時代に耐えうる／先んじた学生を、どのようにして社会へ送り出すかという視点で、創価大学らしい AI 教育、AI 時代の人間力を育む教育を明示的に実施し、それを学生が就職活動の中で社会へ向けて発信することができると尚良いかと考えます。就職力・企業評価が強化されるよう、卒業生ネットワークも更に拡充・活用してみるのはいかがでしょうか。

この視点は、今後、創価大学における社会人教育、留学生教育においても有用だと思われます。社会で求められている AI 関連スキルや素地だけでなく、AI では代替できない人間の深みを、建学の精神に基づいて体系的に育てることができるのは創価大学だけだと思います。

(2) 研究

①長所・特色とされた事項

○重点研究の推進

- ・ 報告書に記載されている重点研究については申し分ありません。一方、創価大学に在籍する研究者の研究分野は多様に広がっているはずで、文系分野も含め素晴らしい研究がなされているに違いありません。重点化すること自体を否定するものでは決してありませんが、多くの研究成果を可視化していくことも検討いただけるとよろしいかと思います。

(おそらく紙幅の関係もあり、全ての研究をあぶりだすと大変なことになるのだと拝察しますが、より幅広い分野の研究について、評価できるとよいと感じました。)

- ・ 重点研究拠点を定め、研究資金の獲得支援や若手研究者の育成まで、研究力を組織的に高める基盤が着実に整っていると評価しました。ヒューマングライコームをはじめ、世界につながる研究も生まれている。
- ・ 糖鎖生命科学融合研究やプランクトン工学、マレーシア研究等について、特定領域における取り組みは高く評価されます。
- ・ 世界が注目する、評価されている研究を創出、推進していることは大いに評価できる。

②課題とされた事項

○研究内容の発信と研究ネットワークの拡大

- ・ 研究の各取り組みは評価できるものが多い。これらを今後さらに文理融合というような形で分野別だけでなく、研究者のネットワークが広がることにも期待したい。
- ・ 大学全体として見たときに、「創価大学の研究といえばこれ（USP の観点でも）」と世界から認知されるところまで、もう一段の飛躍を期待したい。
- ・ 世界的な研究の“先”が見えてこない(自分が無知でもあります)。周知、認知が足りないのか。研究者・教員の発信力、他大学との交流(縦、横のつながり)、共同開発等にも積極的な動きを。研究と教育は「両輪」と思っているの、どちらかに偏りがなく、世のため人のためという思いを強く持ってもらいたい。そのためには、大学としての支援、金銭的な補助も必要となる。
- ・ 各種研究ともに目標を達成していることが評価できる。産業界と連携した、産学連携の取り組みもあれば、今後ご紹介いただきたいです。意見は申しませんでしたが、理系の研究は進んでいます、文系分野での研究への取り組み等があれば、今後開示していただきたいです。
- ・ どうしても、他の主要私立大学と比較した際に研究力の量や外部資金、論文総量で差が出ているように見受けられます。留学生受け入れのお話もありましたが、特に博士号保有者や外国籍研究者を受け入れることでの研究者数の拡大や、産学連携の拡大、研究室支援人員の増強等、(悩ましい分野であることは重々承知の上)是非、国際評価向上のためにも果敢に取り組んで頂きたいと思います。(社会人研究者も増えてきていると思いますので、そのような人員を取り込むための施策等も考えられるかもしれません。)

(3) SDGs

①長所・特色とされた事項

○国内大学トップクラスの取り組み

- ・ そもそも、かように SDGs に注力されていること自体が評価に値すると思います。そのうえで、単に大学運営上の取組にとどまらず、教育活動として高校生までも含めて展開されていること、また国際連携の中で取り組まれていることが創価大学の独自性であり、取り組みの価値を高めていると評価しています。
- ・ 最も評価したのは、SDGs が取り組むテーマではなく、大学の教育や文化そのものになりつつある点です。学生が社会課題を自分事として捉え、実際の行動に移している姿に、教育としての成果を感じました。大学運営や研究、国際連携にも一貫して組み込まれており、今後はこうした実践を、レポート等を通じて更に社会へ開き、他大学や高校などにも広げていく役割を期待します。
- ・ サステナビリティ・インパクトレーティング 2026 で、各項目が国内大学ではトップクラスの評価を得ていることは評価できます、世界基準でのランキングの上昇を期待しております。ユネスコスクールへの正式加盟していることも、大学としての取り組みの覚悟の表れで、非常に評価しています。SDGs の取り組み、アイデアを助成する取組を行っており、採択されたものが、どのような取組で、どのような結果に至ったのか是非今度ご紹介いただきたいです。
- ・ 創価大学の SDGs における取組は、他の私立大学より明確に強みを持っている領域だと思います。教育面での強みでもある世界市民教育や国際性とも掛け合わせ、更に創価大学らしい取り組みへと発展させていかれることを期待しています。

- ・ 本取り組みは、創価大学のオリジナリティがあふれる取り組みと成果であり、高く評価したい。
- ・ 大学でもトップクラスの取り組み、目標を達成していると思われる。大学全体で、積極的に、スピード感を持って推進しており、今後も持続し、地球をより良い方向に導いて欲しい。

(4) ダイバーシティ

①長所・特色とされた事項

○ダイバーシティ&インクルージョンの着実な進展

- ・ グローバル化と DE&I の取組を中心に、DE&I が進められていることを評価します。前者においては、SGU をしっかりと定着されることを試みている点で補助事業の真の在り方を提示しています。後者においては、「創価大学ダイバーシティ・インクルージョン推進センター」を設置するなど「思い」のレベルだけではなく組織として、また機能として、取り組まれていることが素晴らしいです。
- ・ 留学生の受け入れや支援、障害のある学生への支援、女性教員比率の向上など、多様性を支える環境整備は着実に進んでいると評価しました。
- ・ これまでの取り組みも、大いに評価できる先進的なものだと思います。今後も、引き続き女性教員比率の向上、女性職員比率の向上へと取り組みを続けていかれると思いますが、障害のある学生・スタッフの受け入れ、LGBTQ 関連の取り組みについて、大学の施策として様々なイニシアティブを行うだけでなく、学生・職員・教員もどのように受容度が改善したのか等の率直なフィードバックがあると尚良いと思います。
- ・ 留学生の受け入れ、支援体制の充実等非常に評価できます。女性活躍、進出についても、女性の職員割合が増えていることに評価できます。女性の活躍推進については、民間企業（当金庫でも）非常に腐心しているところでもあるので、是非先進的な取組みを期待しております。期待を込めてこの評価とさせていただきます。
- ・ 女性教員比率は微かながらだが、年々増えていることは評価でき、今後も継続しながら、改善を図ってもらいたい。女性職員比率、若年層は高いが、40 代以上の比率はどうなのか。どの世代でも男女半々になるよう、ライフワークに合わせた施策や環境の整備が必要(男性職員にも配慮を)
留学生の受け入れも急務。日本人だけでは募集も苦しくなるので、アジア圏の優秀層をいかに取り込めるか。多種多様な人種・国々の学生が集うグローバルキャンパスであることを、さらに実感できることを望む。

②課題とされた事項

○多様性による相互作用の発信

- ・ これから重要になるのは、多様な人が存在していること以上に、その多様性から学生が何を学んでいるかが可視化されることだと思います。創価大学が既に持つ豊かな多様性を、授業や教育プログラムの中でさらに学びの力に変えていくことを期待したい
- ・ 多様な出身国からの留学生が学ぶ環境は創価大学ならではの環境である。私自身はこの環境と留学生と日本人学生の相互作用による学び等についてももう少し詳細を伺いたかった

(5) 経営基盤の構築

①長所・特色とされた事項

○大胆な改革と財政計画に則った収支管理

- ・ 改組を通じて入学定員規模を見直したことは非常に評価されるべきだと思います。一方で、学生数が2割減少することによる収入減の影響は大きいと考えます。学費の見直しや計画的な人員のスリム化を検討しているとのことであるので、教育研究等の充実とのバランスを取りながらの舵取りを期待したいと思います。
また、今後の大学界の動向としては、学部を縮小して大学院を拡大することも一つの方向性になっていくかと思われるので、そのような点も検討頂きたいと思います。
- ・ 厳しい大学経営環境の中で、学部改組を含む改革を実行し、2026年度には入学者数を定員以上まで回復させた点を高く評価しました。財務基盤を維持しながら、DXや教育環境、キャンパスへの投資を続けている点にも、将来を見据えた経営姿勢を感じます。少子化の時代には、規模を守ること以上に、世界を視野に入れて「創価大学でなければならない理由」を創り続けることが重要だと思います。その意味でも、今後の改革に期待しています。
- ・ 定員削減をかなり思い切っている。個人的には削減数が多いようにも感じるが、一方で、新しい方向性に結びつけていこうとする姿勢が見られる。この新しい方向性が更なる成果につながることを期待したい。
- ・ 財務面では、資金運用収益が安定して入ってきており、大学の活動を支えているのは、非常に評価できる部分だと思います。支出部分での見直しを適切に行われており、盤石な経営基盤を築いておられ、評価いたします。教育研究費の増加もありますが、本学での充実した教育体制、研究の質を向上させていることに鑑みれば、評価に値すると感じております。
- ・ 財務状況については、ご説明頂きました通り、中長期財政計画に則って収支管理をいただいていると思います。今後の財政上の安定化について、お話にも挙がりました社会人向け大学院や修士・博士領域を増強していくか、留学生へ向けた学費の差別化等のディスカッションが進んでいくと思われますが、加えて卒業生からの寄付金を募るなど、細かいかもしれませんが啓蒙は引き続き行っていくのが良いと思います。

創立者が自ら卒業生の就職先を切り開いてくださった建学当時の先輩方がほぼ定年等で社会の第一線からご卒業されていくタイミングに来ていると理解しています。その次の世代の卒業生の方々に、現在、企業で役員等をつとめられている方々の横の連帯を構築・拡大し、上記在学生向けの就職活動支援や財政的支援、創友会内でのグループ活動等を築いていくこともできるかなと思います。

②課題とされた事項

○新たな収入源の具体的検討

- ・ 2026年度から定員削減をしたが、入学者は僅かだが減り続けている。定員充足して喜んでいる大学関係者はいないと思うが、経営基盤の安定化＝志願者数・入学者数の安定的な確保が第一。
個人的にはもっとコンパクト、スリム(現在の2/3程度)にした方が良い、出来るのではないと思う。寄附金も毎年安定的に入る、増えるわけではなく、無いものとして考え、ネーミングライツ事業等の新たな施策も必要になってくる。通信教育課程・リカレント教育の充実、促進を図る。超高齢化社会に対応し、学び直したい人材は多いと思われる。学費、寄附金等の減少が避けられない状況下では、重要度は高い。

3. 外部評価委員からの講評

- ・ 常々感じ入るところですが、これだけ大きな規模の大学において、取り組みの方向性にぶれがないことは素晴らしいことだと思います。おそらく、確固たる建学の精神が支柱として機能しているからではないかと拝察しています。学生第一という思いがしっかりと具現化され、「学修者本位」という現今の高等教育トレンドを先取りしてきており、その面ではフロントランナーとして注目されるべき存在であると感じています。

全て S でもよいのではないかなと思いながら、期待を込めて A とした項目もあります。一方、S とした項目が完全に完成しているということでもないと理解しています。むしろ、例えば教育については、どこまでいっても完成はせず、常に学生たちのために改善活動が重ねられていかなければならないものだと思いますので、今後のさらなる取組に期待しています。

少子化の中で、高等教育は決断の局面を迎えています。その決断を早くになされた事例としても注目に値します。規模の適正化は教育の質の向上につながるはずであり、その好事例を多く発出していただければありがたいと思います。

- ・ どの世代においても、自ら課題を見つけ、自ら解決することが重要視されています。
「学生第一」「学生のための」であれば、学生にどのような付加価値を与えられるか。そこをもっと明確に打ち出すことが必要な気がします。学び、奨学金、教育、研究、グローバル、就職…全て大事ですが、これだというコンテンツ、尖ったもの、創価大学らしさを改めて考える時期ではないでしょうか。「創価大学と言えば〇〇だよ」(※宗教系の大学、以外です)と高校生も在学生も保護者も普通に口走るワードを創出しましょう。

各大学にとって、今後さらに厳しい状況になります。ピンチな時こそ、チャンスが生まれます。建学の精神、3 ポリシーを改めて落とし込み、自信を持って「選ばれる大学」にしていきたいと思います。そのポテンシャル、エネルギーがある大学です。学生が楽しく過ごせるには何が必要か、自分も課題を持って尽力していきます。今後も大いに期待しています。

- ・ 他の委員の先生方、皆様もおっしゃっておられましたが、「学生第一」をここまで明確に打ち出し、施策を重ねていって下さる大学は他にないと思います。教職員皆様のご尽力に、心より感謝申し上げます。
AI という新技術がすさまじい勢いとスピードで世の中を席捲し始めている昨今、(学生にはなかなか伝わらないかもしれませんが)創価大学の「建学の精神」がどれだけ世の中から強く求められているか。今だからこそ響く、創立者の思想だと痛感しています。

創価大学らしい「AI 時代に必要な人間力」とは何か、人の尊厳を中心に置いた、世界市民としての AI の利活用とは何か。人として正しい選択をする力を培う、という視点でのプログラムや科目、産学連携、社会人教育等々へ向けて取り組み推進を行うことで他大学との差別化にもなり、かつ、社会へむけた骨太なメッセージになると思います。

そのためにも、社会で活躍する卒業生のネットワークの深耕は更に重要になっていくだろうと、私自身、改めて頑張ろうと決意を新たにさせて頂きました。大変にありがとうございました。

- ・ 創価大学らしい取り組みとその成果がしっかりと説明がされていた。SDG s の取り組みや学生参画とその反映、そしてダイバーシティ等がそうした事例であると感じられた。一方、定員削減などを思い切って行っており、今後の新しい方向性につなげていこうとする姿勢もうかがえた。その定員削減をどうポジティブに向けていくかということが現時点ではまだ不透明な部分があるため、継続してこの部分に着目したい。

- ・ 今回、改めて強く感じたのは、貴学にとって「学生第一」や「SDGs 推進」は単なるスローガンではなく、大学の文化になっているということです。中でも印象に残ったのは、学生を教育の受け手としてだけでなく、大学を共に創る存在として位置づけていることです。学生が内部質保証や大学運営にまで参画する仕組みは、これからの大学の在り方を考える上でも、大きな可能性を持っていると感じました。

一方、AI の進化や少子化によって、大学の存在意義そのものが問われる時代に入っています。だからこそ、これまで築いてきた学生第一を守るだけでなく、産業革命に匹敵する時代の劇的な変化に合わせて更に進化させてほしいと思います。

学生一人ひとりが、「自分は何のために学び、何を使命とし（どんな未来を描き）、何をもって社会に貢献するのか」を体現できる大学であること。創価大学には、その原点を大切にしながら、これからの時代の大学教育の「新しいモデル」を示していくことを期待しています。

- ・ 事前質問について、詳細に回答いただいたことや、当日の学長からのご報告も詳細にご報告いただき、理解が深まりました。まずは、学生を第一に考え、学生参加型で大学の教育の質を上げていこうとされている取組み、考え方は非常に素晴らしいと思います。

国際機関への加盟や、外部機関での評価を積極的に取り入れており、自己完結型ではなく、広く意見を取り入れたうえで、大学として新たなものにチャレンジしていこうという気概を感じました。

これから若年層の人口が加速していく中で、定員の充足と学生の質の向上等といった課題に取り組んでいかなければならない中で、DX 化を行いながら、教育の質向上、学生の学びの支援をされているところに感銘を受けました。

特に、未来スケッチの取組みは、将来どうしたいか、どうなりたいかを決めるために非常に有効なツールとなると思います。それまでの感情、行動の記録など、プロセスも見えるところが興味深いと思いました。

社会、地域からの大学への期待もあるとおもいますので、それらのニーズを踏まえた取組みなども、今後期待しております。